

# 長続きの秘訣は「健康」

きゅうり生産者 藤嶋 喜太郎さん(84) 綴子地区 栽培歴24年 作付面積1.5a



薬剤散布も重労働



作付している品種は夏ばやし・夏もようなど



汗をかいた後のカフェオレとパンで至福のひとつ

管内は昼夜の寒暖差を活かし、古くから農産物の生産が盛んな地域です。中でもきゅうりは、41の農家が栽培面積5・2ヘクタールで生産する当JAの最重要作物です。

8月中旬、露地きゅうりの収穫真っ盛りの喜太郎さんは、朝夕2回の収穫作業が日課となっています。今年は梅雨明けが遅かったこともあり、今後の天候には特に気を配ります。「日照量が多いと肥大が進むので適度な大きさと収穫するよう細心の注意を払っている」と話す喜太郎さん。

管内はネット囲い強い風が入らないよう対策も万全。さらに適度な灌水と施肥を行うことで、真っすぐ伸びた高品質なきゅうりを多く生産できるよう管理を徹底しています。

喜太郎さんはきゅうり栽培について、「毎日の管理や収穫し続けなければいけない」という労力がかかるが魅力ある品目。長期収穫が可能で生育中に何か失敗したとしても修正が容易で挽回が可能。出荷規格も広いので収益につながりやすい」と、きゅうり栽培の魅力を話します。

管内のきゅうりの収穫はこれからまだまだ続きます。喜太郎さんは「圃場に来て作業していると楽しい。これからも健康第一に最後まで収穫できるように頑張っていきたい」と気持ちも前向きに語ってくれました。